

相良宗介がコードギアスに異世界転生していたとしたら

Cran

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

磁石の逆側のように反発した二人がいた。それは間違いないけれども、誰も彼もが不器用だったと思います。

そこに、仲介役がいたとしたら、という発想が発端です。

それで選んだのが、原作終了後の相良宗介でした。はてさて、そうなった場合に、何が起きるのか、という気持ちで書きはじめました。

基本は反逆のルールシユ（アニメ本編のみ）ですが、上述の相良宗介の介入に伴い、色々と変わります。

タグの通り、原作の設定から外れますし、独自の色が多々あります。

目次

序章

【前書き兼注意事項の】1話	1
【いつか魔王になるかもしれない少年】2話	10
【いつか魔王になるかもしれない少年は貧弱である】3話	14
【あまりに優しすぎる妹は悪女かもしれない】4話	17
【魔女になり得たけどそんな志向はない少女】5話	20
【幕間というかちよつとしたツナギ】6話	22
【おわりのはじまり】7話	24
【おわりに抵抗する少年少女たち】8話	28
【おわらせたくない少女】9話	31
【おわりに抵抗する魔王になるかもしれない少年】10話	33
【プロフェッショナル①】11話	37
【プロフェッショナル②】12話	41
【プロフェッショナル③】13話	43

序章

【前書き】兼注意事項の【1話

皇暦？年？月？日

自分は、ソウジロウ・タロウ・ブラウン。

そうやって生きている。

たまに、「ソースケ」と呼ばれることがある。ソウジロウから、愛称を作るようだ。

そのたびに、淡々と、ファーストネームをそのままか、ミドルネーム、ファミリーネームの方で呼べとっている。

ミドルネームの方でタローと呼ぶやつもいる。それは構わない。

ただ、ソースケと嫌がらせで繰り返してくるやつもいる。そういう手合いはすべて排除した。

今これらを反芻しているのは、どんどん忘れていっているからだ。いつか、何もかも忘れてしまわないように。

■
アルに助けられて、千鳥と再会できたのは、西暦でいうと何年だったろう。

途中で日本の元号は変わったらしいが、別に興味はなかった。ただ、千鳥と一緒にいられればいい。たまに、戦友^{友人}と会えれば、なおいい。

友人が誰かといえれば他人からはそれはクルツかと言われるが、お互い、言われてもよくわからない間柄だ。

アレは友人とかそうだった生き物ではない。まあ、相棒といったところか。マオもそうだが、まあ、別にそれはいい。

全て含めて仲間と言われるならともかくとして、友人というのは、あの学校の、おせっかい焼き連中だけだと思っている。その他はもう死んでいる。

もつとも、日本で生活するのは色々問題があったので、日本国外から、たまに秘匿回線で通信する程度だったが。

千鳥、というとは他人かと言われて、怒られる。かなめといったら何だかくすぐつたいと言われる。

状況によつては、むしろかなめと言えとも言われるが。普段は愛称がいいらしいが、自分にとつては、未だに千鳥だし、かなめだ。紛らわしいので、これからはカノジョという。

いつの間にか何やら手続きをしたらしいカノジョから「結婚できた」とか言われたが、それはよくわからなかった。

ただ、「あたしたち、二人の日本人として一緒になったんだよ」と、とても嬉しそうだつた。

俺の籍が難題だったらしいが、テツサがすました顔で「もっと早く言ってくれば良かったんです。戸籍の改変も追加も、一晩もかかりません」とか言っていた。

俺が日本で高校生というカバーを使用できていたのだから、当然のことだ。

それで、どうやら自分はカノジョと夫婦になったらしい。何が変わったわけでもないのだが。

■

子供はできなかつた。俺に理由があつたようだ。放射線など当たり前な環境で暮らしていたし、臓器も含めて何度も全身に負傷したから、おそらくは、原因はそれだろう。

「アンタの子供、産めなくてゴメンね」とか笑いながら冗談のようにいつていたが、カノジョはずっと気にしていたようだ。

だが、実際、俺には都合が良かった。

俺にはカノジョだけで十分だったし、それで手一杯だったからだ。他になにか持てと言われても、その程度の器だ。

さて。

確か、カノジョが35歳になったときだ。ろうそくで覚えている。1本ずつケーキに飾ることが難しくなつたので、だいぶ前から、数字で2本のろうそくになった。

ふと、「日本に旅行にいきたい」とカノジョが言った。フィリピンの片田舎で過ごすのも少し飽きたし、人生70年と思えば節目だし、久

しぶりにキョーコとかにも会いたいと言っていた。止める理由はなかった。

止めて聞いたとも思えない。いくら日本が「スパイ天国」だといつても、危険な組織は概ね潰したか、潰されたから、止めるつもりもなかった。

無論、護衛はつけさせることにした。言わなくともつけられていただろうが。

その発言から翌年の夏の時に、手配を済ませて、カノジヨは東京に戻った。俺は別口で用事があつて、3日あと程度に追いかける予定だった。

飛行場から移動して、あの街に到着したことを知らせる電話で、「何年も経つたのに、あまり変わらないねえ」とカノジヨは笑っていた。

それが最後だった。

徐行もせずに左折してくるトラックだったそうだ。居眠り運転でもなんでもない。

カノジヨは目の前にいた他人の子供を守った。

「子供の方は無傷だった。擦り傷もない。本当に全身でかばったようだ」

そう、自分との連絡係を務める、日本のエージェントは言っていた。今、回想すれば、俺がいればよかつたと思いつつ、無理だとも思つた。

護衛と護衛対象との関係は、護衛対象が、護られるように行動しなければ、十分には成立しない。

そして、目の前に轢かれそうな子供がいるのだとすれば、カノジヨがどうするかは考えるまでもない。

ASのアルがいたらどうかかわらないが、密着しているのでもなければ、AI操縦じゃないトラックはどうにもできない。

本当に事故だったから、防げなかつたのだ。計画的な犯行であれば、むしろ防げていただろう。

だから、お前が気に病むことはない、クルツ。そう伝えたが、あいつは、どうやら泣いているようだった。

「伝言がある。辛いと思うが、聞け。『あたしは幸せだったよ、ソースケ。あんたを置いてくのは嫌だけど、自由になつてくれていいから』だそうだ」

聞きながら、俺はカノジョをいつでも守れるように準備していた拳銃——その他にも武装はあったが——の状態を確かめるのに忙しくなっていた。

「確かに受け取った。クルツ。お前が直接伝えてくれたのは幸いだ」
「どうした……、おい」

「お前以外の、そうだな、クラスメートに回りくどく伝えられたり、新聞などで知ることになったりしていたら、俺は、あいつが言う『何かをしでかし』た可能性が高い」

「おい、お前。大丈夫、か」

「肯定だ。それから、再度言うが、お前は気に病むな。俺の選択だ」
なにか言っているのはわかったが、それは覚えていない。

そのときには、俺はカノジョとずっと一緒にいるという約束にもとづき、カノジョを追いかけるために、すでに自分の頭にあてた拳銃のトリガーを引いていたからだ。

カノジョの本意と異なることは理解していたが、俺が自由にする、というのはこういうことでもある。

文句があるならあの世とやらで聞いてやる。

そして、どうやら、弾丸一発程度では、頭部を破壊しても、人間とというのは一瞬では死なないらしい。

ひとつ学習した。また、嬉しかった。伝言を遺せたということ、クルツは言わなかったが、おそらく、そういうことだ。

その苦痛を少しは共有できたのだから。

■

なにかの夢かと思った。

カノジョの腕に抱かれているように、誰かに抱かれていた。拒否しなくなったが同時に安心感があって、そのまま眠りについた。

次に気がついたときは、知らない女の乳に吸い付いている状態だった。このときは、拒否感はなかった。

「ああ、来世という奴か」と、カノジョから色々聞いた話を思い出した。

物理的な能力の問題か学習の問題か、どうやら両親らしい男女の会話はわからなかった。

髪や目の色、また、部屋の様子や調度品など、これらは明らかに日本人以外の民族であり、その住居だろう。使用される言語も英語に似ているが、ところどころ違う。方言がきつい田舎かなにかだと思っただ。とはいえ、どうでも良かった。

だが、あるときに聞いた、電撃が走るような言葉は今でも思い出せる。「もうすぐ2004年」が云々と目の前の男女が話していたのだ。

西暦2004年を今後迎えるのだとすれば、自分とカノジョはまだ会ってすらいない。

で、あれば、「過去への転生」とかいうやつかもしれない。それならば、今度こそカノジョを守れるのではないか。もっと傷つけず、もっと幸せにできるのではないか。

なにかのときにカノジョが冗談で言ったことがある。

「ねえ、あんたがあたしと出会う前で、記憶があつて、生まれ変わったら、どうしたい」

その時は色々と考えたが、もう一度カノジョと出会う以外の選択肢はなかったし、あの過去がなければ、おそらく、カノジョとともに過ごせる可能性は低い。だから、過去の自分をトレースして、知らないふりでもう一度同じことをするのではないか、といったことを答えたような気がする。

これが、サガラソウスケではない自分として過去に生まれ変わったというのであれば、することは明確だ。

自分は親切な他人でいい。二人が出会い、穏やかに過ごすことを助けるのだ。

一連の事件。あれからも無駄に月日を過ごしたわけではない。ただの兵士としての専門家（プロフェッショナル）であった当時の自分など、相手にはならないだろう。サポーターとしては十分すぎるほどの力量はあるはずだ。

ああ、ことによれば、もつと助けられるかもしれない。自分が巻き込んでしまった結果として殺された少女や、仲間たち、当然親父もだ。そうすると、ミスリルにどうにか接触する必要があるが、まずは時期を待つべきだろう。

3本のろうそくが火をたたえる様子を見つめながら、俺は思った。さらなる情報収集をしたかったが、残念なことに、この男女の方針として、テレビやインターネットは、幼い自分には触れさせないこととなっているようだ。男の書斎には鍵がかかっているし、時折、居間に放置されているデバイスもパスワードがかかっている。

どちらもどうにかできないことはないが、幸か不幸か裕福な家庭であるらしく、自室から出るときには常に俺のそばには使用人がついていた。

不審と思われる行動をとった結果として、時間を浪費することは経験済みであるし（高校のあの日々の半分以上は謹慎やら簀巻きやらの思い出が埋め尽くしている）、以降の生活に何かしらの制限を受けるのも問題がある。

そうすると、まずは食べることに、フィジカルを鍛えることに、それだろう。知識はあっても肉体がついてこないのであれば役には立たない。母親とされる女は本の読み聞かせなどをしたがたったが、概ね言語は理解できていた。時間の無駄だ。

結論が出るのは早かった。目下の任務は、可能な限り自室で鍛錬することだ。

■
息子は元気になった。

もともとは、精神的な発達に異常があると思われていた息子だった。

もう5歳になる。いまだに寡黙だが、それさえ除けば、これほどの子はほかにいないと思う。

言葉には出さないが、何かを教えたときに、理解したことを目で表現するのだ。

特に運動能力などは言葉にできない。私ももともとは軍属で、士官学校を上位20位内で卒業した口だったから、その血を受け継いでくれたのだとすると嬉しく思うが。あの子は同世代相手との試合など話にならないし、この「ニッポン」でやっている道場で、すでに10歳相手を軽く圧倒してみせる。さすがに体格の差は大きいものの、「ウデズモウ」なら負けるが、技術込みでの勝負なら負けられない、という具合だ。

こうなると、悔やまれる。自分が上司の不祥事を押し付けられて、この辺境のニッポン大使館の大使として飛ばされてしまったことを。いや、そうでなければ妻とも会えず、この子もいなかったのだから仕方ないといえば仕方ない。

ただ、いつでも大きな空に羽ばたけるものを持った自分の子を、もつと飛翔させられる場所を与えられないことは悔やまれた。

それから、もつと悔やむこととなった。

ずっと、デジタル端末は使用させていかなかったが、強い関心を持っていたのは分かっていた。

予定よりもかなり早かったが、5歳の誕生日のプレゼントとして、ラップトップを与えたのだ。喜んで自室でいじくり回していたと思った我が子が、ふっと、何の気配もなく、居間にいる私のところに一人でやってきた。

妻と私の色が混ざった若干茶色がかった銀髪と、私達の愛する猫目石の瞳が、不思議と目に入らないくらいに透明に見える雰囲気をもとっていたのが思い出せる。

「父さん。今って何年だったけ」

答えたが、あの子は色を映さないかのような目で続けて確認してきた。

「うん。何歴かな」

「皇暦だが」

未だにわからないが、与えた端末で様々な情報に触れたことが原因だったらしい、我が子が感じたあれは、絶望というものだと思う。

西暦じゃないとか、言語も似ているが違う理由はこれかとか、日本

なのに日本じやないとか、なにかよくわからないことを呟きながら居間から出て行った。それから、自室で倒れているところを発見することになった。

昏睡状態で、全身の発疹と高熱。医者は食中毒か何かだといって、言葉を濁していたが、多分、そうではない。

あの子は、1ヶ月、目を覚まさなかった。

あの子に付き添っていたとき、その目が覚めたと悟ったときには、私はなにか大いなるものに感謝して、叫んだ。

「オール・ハイル・ブリタニア」、その言葉が轟いたらしく、妻や医者が飛び込んできた。

■

異世界転生、と言っていたと思う。

カノジョは日本を出てから却って日本のサブカルチャーを好むようになっていて、自分が読んだ本などについて色々教えてくれた。

どうやら、「過去転生」とやらではなく、俺がなったのは、前者のようだ。

そして、カノジョにまた出会える世界ではないのだと知って、死のうとした。洗面所に置いてあるもので、幾らでも毒物などは作ることができるのだ。

だが、前するときにはいなかった「両親」という存在がいて、たまに一瞬だけ意識が微かに浮き上がるたびに、泣き腫らした顔で、しかし何だか暖かなもので包み込んでくることを感じるので、「俺も死んではいけない」となんとなく思った。何人も殺してきたし、殺されかけてもきたが、そういえば、カノジョを失ったときのような気持ちは味わったことはなかった。

俺が死んだら、間違いなく、この両親とやらはそれを味わうことになるのだろう。

カノジョがくれた安息とは違うもの、親父がくれたもの、あの^{ガッ}クソ野郎による教導とも違う、この両親という男女から与えられるそれは、どうやらいつの間にか、かけがえのないものになっていた。

もしかしたら、カノジョも転生していたらという考えがよぎること

があつたが、無理筋というものだ。

こぼれ落ちるように、手のひらからサガラソウスケであつた記憶はだいぶ失われてきている。代わりに、カノジョがよく言っていたジョウシキとやらは、それなりに身についたようでもある。

とりあえず、失脚したらしい神聖ブリタニア帝国の男爵と日本人との間に生まれた、なんの変哲もない子供として生きること。それが、目下のところ、自分がこなすべき任務である。ただし、最優先は、こうして、カノジョのことを繰り返し思い出して、決して放さないことだ。

「約束だからな」

「ん、なにか言つたか、ソウジロウ」

「問題ない、父さん」

いま、カノジョはいない。だが、護るべき存在はいる。

だから、まず名乗りを変えることにする。

自分はソウジロウ・タロウ・ブラウン。

「いつか魔王になるかもしれない少年」 2話

(こいつは変なやつだ)

ルルーシュが感じた、その1歳年下の少年への第一印象はそれであつた。

自分がここにいる名目は避暑・旅行、ただし、実質は日本への人質である。住まいは枢木神社。

自分が皇帝の息子である点さえ目をつぶれば、貴族間ではよくある、ただの布石の一つに過ぎない。

妹のナナリーとともにこの地へ来て、どれだけか。

妹と、短期間の付き合いながらいつの間にか友人となつた枢木スザクと3人で過ごしている中に、「テロで家族に害を受けたこの子も預かることになつた」ということでやってきたのは、ルルーシュにとつてはよくわからない少年だつた。

無表情なうえに言葉が少なく、ブリタニア人だそうだが流暢な日本語をしゃべる。頭も悪くなさそうだ。何ものかと、自分たちの監視かとまで疑つてしまうような、だが、子供である。

なお、神主である保護者にそれとなく聞いても素性は不明だつた。

(ええい、匿うつもりなら、バックグラウンドくらいは確認しろ)

周囲に誰もいないなら叫んでいる。キョウト六家との政争とは無関係に思えるほど安穩とした、枢木家をはじめとするものたちに救われている身でもあるから、言葉にはできないが。

こいつは、外見はほぼ日本人だが、目の色は異なる。

ブリタニア人、あるいはその他の民族でも、また、カラーコンタクトでもすれば日本人で通じるだろうし。付け加えれば、美少年と言つていいだろうし、変装でもすれば美少女にもなれそうだ。

また、不似合いに、日本語も箸の使い方もうまい。

よくわからない、一種の老成した気配も感じる。したがって、当初、彼に対するルルーシュの警戒心は最大だつた。

(こいつは変なやつだ)

ある、きつかけは、ソウジロウが枢木神社の裏でトレーニングをし

ている姿をスザクが見つけたことだ。

「何してるんだ」

スザクがした質問に、端的にソウジロウは答える。

「持久力の鍛錬だ。単なる筋力や技よりも、優先すべき事項だ」

なんなのだ、こいつは。

作務衣が気に入っているらしく、常に身につけている少しだけの長い服装で走り込みをしていたソウジロウを見る自分の視線は、その気持を全力で主張するようなものだっただろうと、ルルーシユは後で思う。

ついでにいうと、真似るように裏庭での全力往復ダツシユを始めた友人（スザク）を見る目も同じだったかもしれない。

まあ、スザクは基本的に脳筋だから、仕方ない。

（こいつは変なやつだ）

何回目だろう、そう思ったのは。ルルーシユは死んだような目でその光景を見ている。

スザクは地元の道場で武道を習っており、すでにその実力は他を圧巻するほどだ。

偽攻撃（フェイント）やだまし討ちに弱い素直さがなおせれば、自分を超えることもできる素質があると、指導する藤堂鏡志朗とやらも述べているらしい。

そのスザクが一撃もあてられずに、あしらわれる姿が目の前にある。

なお、これまたスザクがきつかけである。

神社から少し離れた林の中で、短刀に見立てた（と、ルルーシユは推測した）木の枝で鍛錬をするソウジロウを見つけたスザクが、「手合わせをしようぜ」と無邪気に持ちかけたことによる。

結局、30回ほど挑んだスザクが1本も取れずに体力が尽きて倒れて、それからナチュラルに落ち込んでいるのをナナリーが慰めることになる。

それだけで済むならまだいいが、その横で空気も読まずに、スザクの弱点、欠点、褒められるべき点を滔々と指摘するソウジロウのせい

で、あまりナナリーの慰めが意味をなさなくなってしまうたのは少し気に食わなかった。

■ すこぶる優秀な兵士になれる。

スザクに対するソウジロウの見立ては、その点では絶賛である。

(この年齢でここまで動けるのか。成長したスザクと敵として戦場で会いたくはないな。おそらく、相討ちにも持ち込めないだろう)

と、肉体年齢としては年少のソウジロウが思ったりしているのは、お笑いごとであるかもしれない。

(とはいえ、もつと大局的に物事を見る考えは必要だな)

格闘戦というのは心理戦でもある。

相手を見つめて、自分と相手を盤上に置いて、相手がどのような考えて、どのように動くかを瞬時に察し、かつ咀嚼し、自身の行動に反映させる技術や鍛錬が必要で、その点については、ソウジロウはプロフェッショナルであり、卓越している。

ソウジロウは、スザクの現時点での、兵士としての弱点を見抜いていた。

(素直すぎるし、直線的だし、思考も閉鎖的だ。有能な前線兵士で終わる可能性が高い。指揮官はともかく、司令官は到底無理だな。狭まった範囲で、任務目標を破るだけの駒扱いになる)

それって割とお前じゃないか、というツツコミを誰かがハリセンで入れるかもしれないような事を考える。

(情勢を鑑みるに、この日本が神聖ブリタニア帝国による戦禍を被る危険性は大きい。となると、スザクが軍人として進むパターンは大いに考えられる。周りが放っておかないはずだ。下手に有能すぎるせいで目立つ。特にこいつの場合は、狙撃の一発や、または搦手や不意打ちに晒されて、あっさり死ぬリスクも高いということだ。

それを防ぐために、「自分」が教えられることは何だ)

手ぬぐいで、わずかに汚れた体を清めながら考えているソウジロウは、なにか自分が、両親以外にもう一つ抱え込んでしまったらしいことには気がついていない。

なお、抱え込んだ対象の仲間のルルーシュについてだが、ソウジロウは、兵士としては2流以下だと踏んだ。何よりフィジカル的に軍事的な適正がないうえに、当人にそれを鍛える気持ちがない。

普通ならそれで終わるところだが、気に入ってしまったスザクの友であり、何よりも妹のナナリーを見る目が、どこか前の自分との共通性があるように感じてしまったから、これもまた、何かをもう一つ抱え込んでしまうことになる。

(無理矢理にでも走り込みはさせるか)

あと、鍛えられる点はあるかもしれないが、本人次第だな。

【いつか魔王になるかもしれない少年は貧弱である】 3話

ルルーシユは膝を抱えていた。頭ではなく。

(本当に何なんだ)

確か先日からも何回か繰り返したような問いであるが、今回については、物理的に頭を抱える余力がないという違いがある。

読書をしながら、ナナリーと他愛もないおしゃべりをする日常だった。

それが、まあ自分たちの行動自体は概ね変わらないが、壁紙が変わった。

いまや、ルルーシユからすれば拷問のような鍛錬、例えば柔軟体操から始まって休憩と水分補給を挟みながら数時間に渡る走り込み(と言われたが、かれにとっては、アレはダツシユというものに感じられたし、走り込みというのは平面のグラウンドでするものではないだろうか)、それから組み手、最後に整理運動をするといった背景である。

「お兄様、今日は、スザクさんは勝てましたの」

「俺の見る限りでは、1本も取れていないな」

「だいたい、付け加えられたこの後段のやりとりは毎日繰り返されていた。」

そのたびに、ナナリーはナナリーで、今日はどうやってスザクを慰めようか、などと考えているようなので、軽い嫉妬を覚えなくもないルルーシユであった。

そんなときである。

普段はルルーシユと直接話しに来ないというか、ソウジロウが積極的に話しに来ることがないというべきか、整理運動直後に力尽きて裏庭に大の字になっていいるスザクを横目に、やってきたのだ。

「お前も走れ」

何を言っているのだからよく分からなかったので、「ハア」と疑問ともため息ともつかない答えを返した。

明らかに自分は運動向きではない。どちらかといえば普通寄りの貧弱分類が正しい。頭脳労働こそが自分の本領で、筋肉は二の次だ。それは目の前の幼馴染たち——そういえば、このときにはもうソウジロウと馴れ合っていたなと後に思ったりもした——を見れば明確で、したいと思ってもいかなかった。

「ふむ」

年下のクセに、不似合いな感情がこもった視線で、ソウジロウはルーシユに言ったのだ。

「現代戦に白兵戦能力は必須とは言い難いが、持久力は常に必要だ」

先日のスザクへの発言に類似した指摘をされて、前にも言ったでしょうと言われた子供のように意味もなくカチンと来たのは、幼さゆえだろう。

「それで、何が言いたいんだ、ソウジロウ」

「お前は明らかに兵士向きではない」

カチン度合の係数が1ポイント増えた。

「お前は兵士向きではないが、自分が見る限り、兵士よりも広い視野は持っているようだ」

ちよつと係数が減った。

「だが、例えば、何かの軍の指揮官になったとすれば、場合によっては前はお荷物になりうる」

増えた。

「理由は分かるか」

困った。

「アフガニス……ほん、そうだな、例えば、荒廃した市街地や広大な山岳地帯で指揮官をすることになったとすれば、自身が徒歩で移動する必要も出てくるだろう」

クルマが走れないケースが多いし、ジャミングを受ければ遠隔的な指揮が困難になるといったことがある。

そうすると、武装し、ときにそれを持って全力で走ることが迫られる場合もある。

ソウジロウが想定したケースはそれだ。

なお、ルルーシユは、

(この軍事オタクは一体何を食べて育ったのだろう)

と、少し遠い目になりつつも、

「なるほど、たしかにそのとおりだ」

と、認めざるを得なかった。

素直にうなずけないというか、対抗心が働いてしまうので素っ気なかつたが。

そのうえで、自分の返答を後悔した。

「よし。では、明日から走り込みを開始する」

いや、ちよつと待て。

後悔というか拒否感がありながらも決定的な拒絶ができなかった理由は、

「場合によつては、ナナリーをお前が担いで逃げることもありうるのだぞ」

という言葉であった。

そうした経緯で、バケモノ2人とともに走り込み(起伏のある概ね山中での障害物あり持久走)をする羽目になった貧弱坊やである。

当然ながら、あつという間についていけなくなり、ルート中で倒れているところを、帰路時のバケモノたちが回収し、交代制のおもりつき持久走という新しい遊びをすることになった結果を、青息吐息の状態から回復してから聞くこととなった。

なお、落ち込むルルーシユをナナリーが初めて慰めてくれたので、それはそれで嬉しいものであり、そんなご褒美も目当てに、「走り込み」は継続することとなった。

【あまりに優しすぎる妹は悪女かもしれない】 4話

ああ、いつもの音がする。

お兄様でもなく、スザクさんでもない、あの足音だ。

誰よりもつよく、誰よりも悲しい音だ。

「ちゃんと栄養と水分は摂取しているか、ナナリー」

そんなことをいう。

「もちろんです、ソースケ兄様」

わざとその名前をいうと、このひとは困る。その困った気配を感じたくて、わざと、する。

もう何回繰り返したかわからないくらい、やっている、やり取りだ。

「ソウジロウと言ってくれ」

「仲良くなった方には、愛称をつけるものなのでしょう」

これも、わざと聞く。初めての質問だった。

今度は、いつもと少し違う反応がきた。嘆息しながら、というのは同じだけれど。

「自分をソースケと呼んでいいのは、誰が呼んでいいか、自分が決めると決めたからだ。だから、それはやめろ」

ちよつと強い口調だった。

どうしよう。

困らせてみたいのはあったけど、嫌がられているとは思っていなかった。

怒らせたかもしれないけど、伝わってくるのは、悲しさよりひどく強い哀しみだった。

何も言葉にできず、ただ、ずっと時間が経ったあとに、わたしはただ、

「はい」

としか口にできなかった。

どうしよう。

ごめんなさいしたほうがいいんだろうか。でも、それは望まれていないように思う。

でも、なにか言わないと。と、思つてそう言った。
不十分すぎる言葉だ。謝罪でもそれ以外でも。

「いい」

でも、いつものぶつきらぼうの言い方だが、わたしの頭に手が乗せられた。これもいつもと違う。

「ルルーシユに怒られるな」

ぼそつと呟いたあとで、付け加えられた。

「その呼び方以外で、呼びたい名前があったら、好きに呼べ。」

その呼び方は、ナナリー専用にしてやる」

はた、と。

え、なにそれ。

なんて。

どうしよう。どういう意味。

え、なんて呼ぼう。

そんなような、いつぱいの感情が頭をかきめぐつて、いつの間にかお兄様とスザクさんとお茶を飲んでいた。

後から気がついたのは、このひとは本当に不器用で、言葉足らずで、優しいんだなということだった。

お名前、何にしようかしら。

■

この世界に来てから、何年が経ったか。

「父さん」も「母さん」も、まだ病院からは出られない状態にある。

枢木神社は、有り体に言えば、問題のない場所だった。

まず、射線を障害する物が多く、狙撃の心配は少ない。

障害物はあつても開けているので、部隊を展開されても先んじて察せられ、致命的な問題が生じる前に退避できる。

水分、野草を含む食料その他が豊富で、仮にゲリラ戦になつても一週間は保たせられる。

とはいえ、「俺」にとつてのカノジョと同様に大事に思うなら、おいこらルルーシユ、まず、お前が尽力しろ。

「自分」にだつて分かるぞ。

この娘は純粹で、ひたむきで、どこかカノジョを思い出させる。
お前がこの娘をないがしろにしたら、全力でぶん殴ってやる。ハリ
センでな。

【魔女になり得たけどそんな志向はない少女】 5話

実は、お兄様のことはあまりわかっていない。

事件が起きて、今、ニッポンという場所にいるのはわかるのだけでも。

とつても頭がよくて、とつてもわたしを大事にしてくれていることはわかる。わたしもお兄様はとつても大切だし、大好き。

お父様やお母様というひとがいたというのは知っているけれど、お母様という方が亡くなったというのもわかってはいるけれど、覚えていない。

なにかの戦いに巻き込まれて亡くなった、ということ、たまにお兄様がお話しされることで理解しているけれども、あまり実感はない。

だって、わたしは(わたくしとしなければならぬだろうか)、その時、何歳だったでしょうか。それも、わからないのだから。

わたしにとって、「盲目」と言われることも、あまり、よくわからないし、「車椅子でしか動けない、可哀想」とか言われるのも、やっぱりわからない。

だって、わたしにとっては、今の自分が当たり前だったから。

でも、お兄様がなにかものすごく、ご自分を責めていらつしやるのは感じられるので、「ああ、そうかー。自分は可哀想なのかー」ということは考えた。

ある時、くるるぎすぎくさん、という方が、お兄様のお友達になった。

お兄様はどちらかといえば、わたしばかりで、ほかに気にしない方だったので、とても嬉しかった。

それで、また、ある時、そうじろうさんという方が来た。

お兄様いわく、「ブリタニアの犠牲者であることは間違いないが、それ以外はわからない」というおはなしだったけれど。

おはなしをしてみると、なんだか、とつても嘘のないひとだなあと感じた。

なんとなく、このひとはいいひとだなあ、と思った。

なんというか、お兄様やわたしを殴ったり蹴ったりしないひとだと思っただ。ちよつと勘違いがあったけれど。

ええと、「手合わせ」「組み手」「走り込み」などのときに、スザクさんや、途中から加わったお兄様が大変に痛い目にあっていることがわかった。

でも、「やめてください」なんて、言えなかった。だって、このひとは、わたしたちをまもろうとして、そのために行っていることが、わかっていたから。なんでわかるのかはわからないけれど。

みんなが楽しそうにしているのが、ちよつとوراやましいし、くやしいので、ソウジロウさんをからかうようになった。

でも、呼び方はからかつちやいけなかったらしい。

1回だけ、おこられた。

かわりに、わたしだけの呼び名をつけていいって、いわれた。

まだ、決まってるから、こんやはずっと考えようと思った。

こんやも、になるけれど。

こんやは何日も続いたから。

あ、決めた。

あした、そのお名前前で呼ぼう。

でも、それを伝える前に、それは起きた。

【幕間というかちよつとしたツナギ】 6話

夏休みというのがもうすぐ終わる前だ。

ソウジロウは、ルルーシユとチエス盤を間にして見合っていた。

基本的にルルーシユが勝つのであるが、チエス盤はついこの前まではこの土蔵に存在しなかったものである。

いつの間にか、おもちゃとして、与えられたのである。

いつの間にか、としたが、理由は明確だった。

■

「お兄様」

「どうしたんだ、ナナリー」

基本的に、ルルーシユは母鳥のように、ナナリーには優しく接する。

問返す声は優しいというか、甘い。

「ええと、ソウジロウさんが、チエスを買って頂いたのですって」

ええと。

言われたことがよくわからない。

この神社は仮の住まいというか、政治的な理由による問題で、ほぼ隠れ家で牢獄でもある。

以前は違ったかもしれないが、今は形ばかりの神主に、バイトでの通いの巫女しかない。

食事も安心して食べられることはない。ソウジロウがここに来てからは、栄養は満点でその他はお察しな山中の収穫品が食べられるようになったが。

野鳥や蛇はもちろん、野草というのも意外に食べられるものなのだなあということも学習できた。

ところで、チエスはナナリーが言うには、2日後くらいには届くそうだ。

通販ってすげーな、とルルーシユが思ったか思わなかったか。

現実を受け入れるために、愛する妹に聞くことにする。

「どうやって、そんなことを」

「ええと、わたしがお兄様がチエスが好きだったとお話したのです」

ナナリーが、ルルーシユはチェスを好きだと言った。だから、ソウジロウがチェス盤と駒を保護者にねだった、なるほどわかりやすい。うん……。わかりやすい……。確かにチェスは好きだ。

ここには将棋か囲碁しかないのだ。将棋はチェスに似ているが根本的なルールは異なるし、囲碁に至っては、教師が必要だろう。これまた困ったことに、将棋も囲碁も、置いてあるだけで、教えられる人間やルールブックがないという状況だった。

そして、おおつぴらに表に出るのが憚れる身の上でもあった。だが、かれも匿われている身でなかっただろうか。趣味としてのゲームをねだって良い立場だったろうか。

自分は、だから、ねだってきたことはないのだが、ルルーシユは遠い目になった。

(あいつがそんな事を気にするわけもないな)
単純な結論である。

なお、チェスが本当に好きかということに関しては、現在は若干思うところはある。

全く勝てなかった兄がいたためだが、なんというか、
(なんでチェス盤はこんなに狭いんだろう)

という違和感がつきまとうからだ。
あと、本人は、これらはソウジロウの薰陶によるものでもあったと気がつかないながら、

(対等の戦力なんて、実戦ならば、ないだろうに)
とも思った。

でも、やつぱり、知的ゲームは好きだったので、それから、ルルーシユは、夏休みの終わりを前にひたすら宿題をこなすため少々こなくなったスザクの代わりというように、ソウジロウとチェスを打つことになる。

【おわりのはじまり】 7話

全身に鳥肌がたった。

総毛立つというやつだ。

前の世界で幾度も味わった香りを感じる。

躊躇なく、ソウジロウは寝具を跳ね除けた。

(これは、幸運というべきだ)

もう、すぐに新学期がはじまるらしい。

スザクがねだつて、遊びで泊まりにきて、今まで一緒に寝ていた。

(偶然の神様とやりに感謝する。手札は1枚でも多いほうがいい)

とりあえずソウジロウがしたことは、ルルーシユとスザクの枕を引っこ抜くことだった。

■ 「なんだ、いったい、ソウジロウ」

寝ぼけているらしいルルーシユと、何かあったと察したらしく神妙にしているスザク。

(逆であるべきだろうに)

嘆息しそうになるが、それはあまり好かれる行動ではないらしい。

「ここはおそらく包囲されている、カバーは知らんが、おおよそ、相手は正規な訓練を受けた兵隊だ。それも、潜入工作を主に行う部隊だろう」

は、とか、えええええ、とかいったリアクションを無視してソウジロウは続ける。

「ただの暴徒ならここまで静かではない」

ナナリーがまだ寝ているらしいのも幸いだ。あの娘には、こうした殺伐とした話はしたくない。

「時間はそうない。即答しろ、ルルーシユ。この情勢でこうした軍隊が派遣される理由だ」

ルルーシユは顔をうつむかせて、考えた。

それから、顔をあげた。

「目的は暗殺。ただし、ターゲットは俺たちそのものではない」

ソウジロウはうなずいた。

「同意する。では、その次は。何のためにそうする」

「実際、島国である日本の戦略的価値は低い。希少金属（レアメタル）も、昔はともかく金、銀、石油も、なかった」

含みを持った言い方をし、嫌そうな顔をする。

「だが、今はサクラダイトがある。戦略的に、極めて価値が高くなった」

顎に指を当ててルルーシユは続ける。

「それをもって日本が経済面で優位に外交を行ってきたのは周知のとおりだ。そして、……実際問題、ブリタニアはやろうと思えばいつでも侵略はできた」

「ああ、そのとおりだと自分も思う」

「とすれば、なぜ今か……。ああ、俺とナナリー、それとお前だ」

ルルーシユはソウジロウを見据える。ソウジロウも頷く。なお、スザクは置いていかれている。

少し沈黙してから、ルルーシユは続ける。

「人質である皇族を殺す。面倒な大使の遺児も殺す。それを日本人の暴徒に責任を押し付け、自国の大義名分にして日本をブリタニアが潰し、サクラダイトを独占する」

ソウジロウはうなずいた。

「多少の間違いはあるかもしれないが、同意する」

国際社会において、戦争を仕掛けるには大義名分が必要だ。

前の世界においても、そんなところがあった。大義名分のあるやなしやは大い。自国民の同意を得られるか否かにつながるし、国民の同意がなければ、内紛などもありうる。そうすると、戦争はおろか経済も動かない。

殺意すら感じられるほどの勢いで、ソウジロウは二人を睥睨した。

それから、自嘲するような表情を浮かべた。

「お前達、兄妹だけなら、こうした展開はなかったかもしれないがな。ここに自分がいるのも、そのための布石のひとつだったのだろう」

それから、まっすぐにルルーシユを見る。

「お前たちの事情はこの間、聞いた。また、奴らは俺……自分たちから奪おうとしている。ルルーシュ、許せるか」

許せるわけではない。

見返す瞳に満足したらしいソウジロウは、今度はスザクを見た。

「お前は、おそろくイレギュラーだ」

「えっと」

問い返すスザクにソウジロウは、

「枢木首相の息子だろう、お前は。目的から考えるに、日本の要人に死なれるのはマイナスだ。この日、お前がここに泊まっていたのは自分たちにとってはありがたいことだったかもな」

そういつて、ソウジロウは何かを投げてよこした。

反射的に受け取って、まじまじと見て、スザクは大声を上げそうになつたのを抑える。

「おい、その、ソウジロウ」

困った顔をするスザクに、平静にソウジロウが応じる。

「この神社の神宝だ。見たことがなかったか」

当然にある。

1年に1回。御開帳という名目で展示される、刀である。その際は、鞘付きだから中身は見られないけれど。

1回だけ、由縁で見せてもらった刃と同じものがあつた。そして、お手製らしい柄がある。

「すまんな、刃物がろくに無いから、少し前に調達した。

ああ、あちらの方は、刃の部分は木製になっている。重さも自慢の出来だ」

抜かなければバレないぞ。と偉そうに言う。

えええ。

なんでそんなものを持っていて、すり替えまでできたのか。

「スザク、時間がない。続けるぞ」

ああ、はい。

ソウジロウは地図を広げた。

まず、このお手製らしい精密な地図を見て驚いた2人だが、「自分の

住まう場所の地形や、有事の逃走ルートを把握するのは当然だ」と返されたりした。

「包囲されていると言ったが、濃淡がある。薄いところから抜けることは可能だ。これだ」

ソウジロウが示したのは、2人にとつて、とても馴染みのあるルートだ。特にルルーシユは死にそうになりながら何度走ったか。

「ここはな、起伏が激しく樹木も多い、部隊が展開しにくい場所だ」

そう、いつも、みんなで走ってきた場所、そのルートだ。

なんというか、弱火に見えるが実際は強火、というべきか。そんな圧力でソウジロウが2人に告げる。

「スザク、お前が先行しろ。お前は先行偵察ができるし、そして唯一の白兵戦力だ。敵がいたら迷わず殺せ。無力化などは考えるな。素人が甘さを出せば死ぬ。」

ルルーシユ、前にも言ったが、お前はナナリーを担いでスザクに続け。

自分はここ、東側で陽動を行う。必ず逃げ切れ」

淡々と、自分たちより年少なソウジロウの言葉を受けて、2人は固まったのである。どう見ても、部隊が展開しやすく、戦力が濃厚と思われる場所を、ソウジロウが示していた。

【おわりに抵抗する少年少女たち】 8話

「ちよつと待て、ソウジロウ」

「そうだ。ソウジロウ」

淡々と逃走ルートと、自分が陽動作戦を行うと示した場所を見て、唾然としたのは2人ともであり、同じような言葉で制止した。

「こちらは、敵戦力は薄いんだろう」

「そうだ、だったら、一緒に行けばいいじゃないか」

ソウジロウは何だか困った顔をした。

「ろくな偵察ができていない。つまり、このルートにも多数の兵がいるリスクはある。スザク、お前は、高い可能性で火器を持った複数の成人男性を相手に、勝てるか。いいや、無理だ」

ここで、B3と示される場所を指す。逃走先だ。

「そのため、自分が陽動する」

今度は、K9と示される場所を指す。先程の、もつとも部隊が展開しやすい場所だ。

「自分たちと違い、敵は通信機などでの連携ができるだろう。だから、それを利用し、派手に暴れる。注目を集められる。お前たちが遭遇する敵兵は最小限になるはずだ」

ルルーシユには、言わんとすることがわかったから、何も答えなかった。

スザクは、単純に、言わんとすることもわかった上で、食って掛かった。

「ふざけるな、犠牲になるつもりか」

ネガティブ
「否定だ、スザク」

ソウジロウは懐から何本もの箸を取り出した。ただの木製の箸だ。そのうちの1本を、タツと、土蔵の壁に放った。

「自分はプロフェッショナルだ。この程度のゲリラ戦で負けることなど、あり得ん」

箸は壁にめり込むほど、突き刺さっている。

唾然とする2人に、ソウジロウは手前勝手に続けていく。

「ルルーシユ、お前はナナリーの護衛に徹しろ」

そして、障子で仕切られた隣室——幸い、この騒ぎでもまだ眠っているようだ——を見やりながら、スザクに言う。

「自分が引き寄せるにせよ、いつでも事故はあり得る。敵兵との戦闘だ。その際に、刀剣はどうやって使うべきか、教えたな。言ってみろ」
まだ混乱から覚めていないスザクは、以前に組み手中にソウジロウに教えられたことを、教えられたままに繰り返す。

「基本的に、刺突で使う。子供だから、身体能力はまだ不足している。斬撃で相手を無力化することは厳しい。でも、突きなら急所を狙えば致命傷が与えられる」

剣道で、年少時に突きが禁止されている理由でもある。

いかに防具をしていても、竹刀という殺傷能力の低い武器であっても、突きというのは防御を突き破り、致命傷とはいわないまでも、大きなダメージを与えられることができるのだ。振りなら打撲で済むものが、

刺突は下手をすれば死に至る。

面や胴、小手などは、相応の腕力がなければあまり通用しないうえに、相手がただのごろつきでもなければ相応以上の防具を身につけているだろう。ソウジロウが言っているのは、そういうことだ。

だから、ソウジロウはうなずいた。

「肯定だ。また、新兵にありがちだが、先程も言ったが殺すべきときは必ず殺せ。殺した後も考えるな」

なんですか、それ。

2人の不理解を理解したらしいソウジロウは、また、ため息をついた。

(本当に時間はないんだが)

だが、これは告げていかねばならないだろう。

「概ね、おおよその新兵は殺すことを躊躇するうえに、不用意に身を相手に晒す。敵兵に運良く殺されず、殺すことに成功したとしても、嘔吐したり自失することも多い。今は、その猶予がない。完全に隠れるか、完全に殺せ。」と言っている。

相手の生存前提の無力化は無理だ。子供が大人を無力化するなど、考えるべきではない。

付け加えれば、刺突は武器の損耗が少ない、継戦能力の維持も重要だ」

必要ならば相手が持っていた武器も使う選択肢もあるが、スザクはまだ、刀剣か、体術以外は仕込まれていない。

ルルーシュは、言われたことを咀嚼することに真剣になった。

スザクは、受け取った真剣の重みを理解して、うなずいた。

「作戦開始は3分後とする。自分はその前提で行動する。準備の時間は短い。即座に行動しろ」

部屋の隅に置かれている目覚まし時計を見て、ソウジロウは言った。

「繰り返しです。ルルーシュはナナリーを護れ。スザクはルルーシュとナナリーを護り敵を殺せ。お前たちは自分が護る。ひたすらポイントに向けて移動しろ。いいな」

濃緑色の、森林の中であれば、ほとんど目につかない作務衣に、更に紺色の手ぬぐいを頭に巻きながら、ソウジロウは2人に告げた。

「ではな」

2人は止められなかった。

のだが、

「待って、ちょっと待ってください」

いつの間にか、隣室の障子が開いていて、這いずりながらソウジロウの方に向かうナナリーがいた。

ソウジロウは、やっぱり困った顔をした。

【おわらせたくない少女】 9 話

とりあえず、ソウジロウは困ると同時に、焦燥にかられて、ナナリーを抱き上げた。

「ナナリー、時間がない。何を言いたいんだ」

あ のとき、孤島で、核ミサイルの直撃時間と、デバイスの残り時間とを見比べた瞬間が不意によぎる。

ルルーシユとスザクは、やけに親密そうな2人を見てか、別の要因でか。

また、ぽかんとしている。

ナナリーは閉ざされた目から、ぼろぼろと涙をこぼしながら言う。

「お話、聞いていました。『ソウ兄様』」

瞬間、他の人には分からなかったけれど、ソウジロウは分かった。

彼女の選んだ呼び方だ。

「だって、ソウ兄様、お死になさるおつもりでしょう」

他の2人が電撃に打たれたように身を震わせたとき、ソウジロウは微動だにしなかった。

「いいえ、違いました。私たちを護れるなら、簡単にご自身を使ってしまわれるおつもりでしょう」

正しい。

ソウジロウは、このとき、はじめてナナリーに気圧される思いをした。

一瞬の沈黙で、汲み取ったのだろうか。

ナナリーは、「降ろしてください」と言った。

ソウジロウは慎重にナナリーを降ろし、ルルーシユの膝の上に預ける。

ナナリーは涙を拭いて、ふうふうと息を整えようとする。それから、見えない瞳でまっすぐとソウジロウを見詰めて言った。

「ソウ兄様」

「ああ」

淡々とソウジロウは応じる。

この年下の少女から、とてつもない想いを感じながら。

「ソウ兄様はブリタニア人でもいらっしやるのですよね」

ハーフだから、確かにそうだ。国籍もそうだ。

ソウジロウは肯定する。

「でしたら、わたしにも申し上げる資格があります」

一息ついてから、キツとして、ナナリーはソウジロウに宣言する。

「ソウ兄様。神聖ブリタニア帝国の皇女がひとり、ナナリー・ヴィ・ブリタニアが命じます！」

その見えない視線はまつすぐだ。背景での、おおむね2人の動揺は

互いに一顧だにしない。

「死なないでください。」

せめて、生きようとしてください！

そうして、それから、また、わたしを、その、撫でてください」

最初はキリツとしていたが、後は、真っ赤に顔を染めながら言った。

またしやくりあげながら、涙をこぼしながらだったが。

スザクは、日頃、あまり自己主張をしないこの娘の積極的な言葉に

ぽかんとしたりしていて、ルルーシユは、

(貴様、いつの間にナナリーに手を出した)

と、1人でガルガルしたりしている。

当事者のソウジロウは、1回息をついて、再度ナナリーのところまで行く。

その景色を述懐すれば、ルルーシユもスザクも、写真に撮ったように思い出せると言う。

「その任務、^{キアス}確かに請け負った」

ひざまずくようにして、ルルーシユのもとにいるナナリーの頭を撫でるソウジロウの顔は、なにかとても懐かしいものを見るようで、また、とても優しい微笑みを浮かべていた。

後に、それが、あいつが笑ったのは片手で数えられる、というオフレコの逸話のひとつとなることは、まだ誰も知らない。

【おわりに抵抗する魔王になるかもしれない少年】 1 0話

ルルーシユは明敏で、感情の洞察や直感的な判断能力に優れている。

まだ未熟であるものの、状況を俯瞰して判断する能力も高いが、非常に大きな欠点がある。

親しい間柄や、好ましいと思える「大事」なものが関係すると、客観的には明らかに非合理的な行動を取る傾向があったり、その優れた判断能力が働かなかつたりする傾向が強い。要するに、感情的であり、年齢相応な精神性を持っている。本人は認めたくはないかもしれないが。

父親に、対外的、対内的にも、ほぼ追放と同義の格好で送られる契機となった件もそうだ。

特に、妹のナナリーのことについては、完全に盲目となってしまう。今回も、そうしたケースの一つだったのかもしれない。

■
あの後、かれ曰く「各種物資」の隠し場所を告げて、目を丸くする2人にいくつかの注意事項をごく短く伝えられて、その直後に3人は脱出に移っていた。

「ふっ、はっ、はっ」

いつもどおりに息も乱さずに先行するスザクを、ルルーシユはきわめて荒い呼吸をしながらナナリーを大事に背負って走る。

子供とはいえ、ひとを1人背負つての持久走。しかも今回は速度が求められている。

(なるほど、たしかに)

スザクに比肩しうるほどに——まだ並んでいないし、もしナナリーに求婚でもされたら真剣に排除も検討しかねないが——自分の中で存在を示すようになった変人からの、指摘を思い出す。

かろうじてスザクを追って走ることができているのは、かれの指導

を受け入れて鍛錬した結果であったのは間違いない。

「ルルーシユ、大丈夫か」

小声といえない程の小声で、いつの間にか立ち止まっていたスザクが、こちらを振り返って心配してくる。

「問題ないぞ、スザク」

汗でびっしよりの顔に笑みを浮かべて、ルルーシユは返す。

「いまでも、ナナリーに同じことを言われたところだ」

「そうか」

スザクも、緊張を帯びた表情ながら、苦笑いを浮かべた。

「でも、少し休憩したほうがいいかもしれないな。あっちの方は、かなり隠れられる場所があったはずだから、そこで栄養と水分を補給するぞ」

どこぞの変人がいつの間にか溜め込んでいた金平糖と塩（調達先は不明である）、水筒（お手製の竹製であり、保存性は低い）の入った袋を示しつつ、スザクが続けた。

提案内容がとても誰かを思わせるもので、少し笑い声がもれそうになかった。

■
（さて、現時点でのこちらの動きには問題はない）

ほんの僅かの休憩でも、大量に消費したエネルギーと糖分、水分や塩分を渴望していたらしい頭と体は、かなり回復していた。

スザクの方は、まだ3分にもならない間にすでに復調していて、ナナリーの世話をみてくれている。率直に言って体力の化け物である。

（この地図、逃走ルート、いずれも申し分ない。確かに、静かだから、この調子で行けば目標地点まではたどり着けるだろう）

一瞬だけ、再度地図に目を走らせたルルーシユは、それをスザクのサイドバッグに戻しながら考える。

そこで、ふと、嫌な閃きを感じた。

なにか間違っている。なにか想定から抜けているものがないか。

チエスなどで重要なものの一つは、少なくとも相手にとって何が一番やられたくないかなどを考えることである。簡単にいうと、相手の

立場にとって考える、ということだ。そして、それを一手だけではなく何手も重ねることだ。

(目的は暗殺、日本人に見せかけて、要人を殺すこと。それが、現場にいなかったとした場合を考えろ)

参考情報として、ブリタニアは「弱肉強食」を是とし、ともに、「ブリタニア人でないものは人間ではない」を地で行く戦略を取ってきていることが加わる。

ある程度の利用価値があったり、戦力的に危険な国であれば懐柔しにかかることもあるが、原則はそうだ。これまでの行動がそれを示している。

(あり得るのは、おれたちが匿われていると判断する。その可能性が最も高い)

枢木神社の人間が、幼い子どもたちに訪れる危険を察して、隠れ家等に隠蔽しているケースだ。それこそ塩対応のような生活だったが、外部からはわからないだろう。

そして、まさか、事前に本人たちが状況を判断して脱出を図ったとは思わないだろう。

そして、暴徒の責任にする前提であれば、敵兵はそもそも何を躊躇することもない。

(であれば)

行われるのは、ここに住む人間の捕縛、尋問や拷問、口封じのための虐殺。当然な手だ。

そして、ここは【枢木】神社だ。自分の親友の由縁の地だ。

(しまった)

実はスザク自身の人間関係は詳しくない。

だから、具体的な影響はわからないが、決して除外してはいけないうりリスクだ。

スザクもまた、大事なものを奪われてしまうのか？

——スザク!

思わず、声を上げそうになったときだ。

スザクが囁いた。

「動くな、ルルーシユ。声も立てるな。あちらから誰かが来る。このままだと遭遇するし、敵の可能性が高い」

ここは隠れられる場所が多い、つまり、木々や草が密集した場所だ。仮にこちらに近寄ってくるものがあるとした場合、移動すれば必ず立つであろう騒音を感じるリスクはきわめて高い。

最悪のケースは、相手が敵兵で、しかもこちらの気配に気づいてやって来ている場合だ。

「ルルーシユ、大丈夫だ。多分、敵だったとしても1人だし、不意打ちできるだろうから、2人までなら問題はない。だから、ここでナナリーと待っているんだ」

どういった超人的な能力をしているのか、すでに相手の人数を把握している。

(そうじゃない、スザク。それも重要だが、枢木神社についてお前に話したいんだ)

「安心しとけ、すぐに戻る」

無理に作った微笑みとともに囁いて、スザクはそよ風のようにいなくなつた。

【プロフェツシヨナル①】 11話

自分の呼吸音がやたらと大きく聞こえる。

スザクが行ってから、何分か、何秒なのか。

ずりずりと、ナナリーのもとに（カタツムリのようなだな、という自嘲混じりの恐怖とともに）近づき、抱きかかえて、大きな木を背中に静かにする。

ナナリーは誰に言われたのか、自分の口を自分で塞いでいる。

やがて、ざつという音がする。

風か、いや、断続的にして、近づいてくる。

ルルーシユは息を殺し、ナナリーも口を塞ぐ。

あたかも、以前に見たことがある、子供の恐怖絵本のような具合だな、と、どこか冷静な頭が考える。

それは少しずつ近づいて来て、

「ルルー、シユ。ナナリー」

つぶやくような声にルルーシユはばつと後ろをかえりみた。

■
「スザクッ」

親友の半身は真っ赤に染まっていた。

「ス、スザクさん」

こちらの動揺を感じたらしいナナリーも声をあげようとするが、それは抑えて、こんなときでもナナリーだけは大事にゆつくりと下ろし、スザクのもとへ向かう。

「大丈夫か、怪我をしたのか」

スザクは血刀を手に、少し無理をしたような顔をして笑った。

「大丈夫だ。相手は軍服を着ていたから、間違いない」

「そういうことを聞いているんじゃないッ」

かろうじて潜めた怒号に、スザクは応じる。

「銃を構えて歩いていて、隙だらけで、でも銃を構えていた。だから、だから後ろに回り込んだんだ」

緊張感がまるで感じられない相手だった。

無防備な脇腹から真っ直ぐに、刀を入れた。室温で弛めたバターにナイフを入れるように入ったらしい。

ただ。

「抜いたら、凄く血が出て」

「いいから、スザク。お前もあいつにいわれただろう。殺すときには躊躇するな、殺したあとで呆然とするなって」

スザクはどうやら、行くときは涼しげに見えて前者はクリアーしていていたのだとしても、後者はできなかつたということだろう。

「いいか。お前がそいつを殺せなかつた、もしくはお前がそいつに殺されていたら、どうなっていた。ここはどうなっていた。考えてみる、そいつは銃を持っていたんだろう」

ゆつくりと、スザクの目に色が戻っていく。

ルルーシユはその肩を両手で掴みながら、真正面からいう。

「お前の役割はなんだった。敵を1人だけ無力化することだけか。その後は、知らん顔か。そんな、軟弱者だったか、お前はッ」

「ふざけんな、そんなわけがあるか！」

近くに敵がいたら、こればかりは隠しようもない具合程度に荒げた声で反論し、ルルーシユの腕を振りほどく。

ついでに、その際に裏拳がルルーシユの頬を貫いて、ルルーシユは吹っ飛び、もんどり打って、草むらに転がる。

少し待っても、動く様子がない。

「お、お兄様」

何やら起きているらしいことに心配するナナリーの声が出た後、しばらく沈黙があつて、風に葉擦れの音がして、ようやく、スザクが言った。

「あ、ご、ごめん……」

どうやら、新兵特有の自失から正気に帰ったらしい。

■

実際のところ、ソウジロウは、任務を三つ、決めていた。

一つ、ルルーシユたち3人を戦域外に逃がすこと。

一つ、枢木神社の民間人を保護すること。

一つ、自らが生き残ること。

それでいうと、先んじてルルーシユが想定した、柩木神社の人間が放置されるのではないかというのは、杞憂だったということになる。

柩木神社の離れへ行き、その他のスタツフがいらないかを確認した（ルルーシユが懸念していた民間人の脱出クリアー）。

そして、ルルーシユたちをそこに行かせなかったのは、ルルーシユが想定したように、優先順位の問題でもあった。仮にその他のスタツフがおり、もし避難所があったとして。神社とその周辺をまるごと焼かれれば、死ぬ。

自分の目的のために切り捨てる覚悟はどうにできているが、それでナナリーが悲しむのはゴメンであるし、今の自分にそれを許したくないのだ。

それから、即座に自身が決めていた陽動ポイントに向かう。

向かったのだが……。

（敵兵が素人なのか、油断しているのか）

真剣にソウジロウは迷った。

見えるのは、ろくなポイントも取らずに直進してくる、少数部隊だ。しかも喧しい。

（こちらは捨て駒の部隊で、別方面から狙っていることもあり得なくはないが。精鋭兵の小部隊による包囲だと思っただが、雑魚なのかもしれないな）

思つて、迷いは振り切る。

一団から離れた後方を、やはり慣れない様子でついてくる、単独兵が見えたからだ。

（本当に素人なのか。敵は何を考えている）

と一瞬だけ思ったが。

試すか。「仕込み」の使い方はそれで決めよう。

隠れ場所から迂回して、前述の単独兵の背後へ向かう。

悠々と接近し、口を塞ぎつつ、敵兵自身が備えていたナイフを引き抜いて、急所に突き立てる。

（専門部隊でなければ、練度の高い一般兵でもない、何を考えているん

だ)

首をかしげながら、ほとんど即死した敵兵の身を漁り、ソウジロウはひっそりため息を吐いた。

出てきたのは、ブリタニア兵のドツグタググだった。

繰り返す。

ドツグタググである。

『色々』と素性がわかるのだ。

空き巣に入る際に自動車免許証を持ち込むようなもの。ソウジロウはため息をつく。戦士(兵士)としてたぎっていた気持ちはすっかり消えてしまっている。

(素人だっただけなのではない。作戦立案者が、何の抵抗も想定していなかったバカだったのか。練度もこのとおり、そうすると、撤退戦はほぼ不要だな)

ソウジロウの任務に、このとき、もう一つ加わった。しかも、かなりの重要事項だ。

(お相手から最高のボーナスを頂けたようだ。よろこんで、回収させてもらおう)

最後に一つ、敵兵の殲滅。

【プロフェッショナル②】 12話

感謝すべきところは色々ある。

「全力で支援しますから、大丈夫です」

と力強く経済的援助を宣言したテッサだったり、

「アンタはもういいの。銃なんていらないんでしょ。あたしがいくらでも養ってあげるわ。うわははははは」

なるほど、確かに日本ではそれ以上のことはできないだろう。

だが、自分は、否定した。

「銃がなくても、できることはあるぞ」

実際、皆、自分を仕舞いこもうとしていたと思う。なるほど、彼女のいうジョーシキが足りないのはそうだろうが、休ませようとしていたのだろうか。

だが、こう、夫婦とやらであれば、夫が養われたままなのは良くないのではないだろうか。

「いやー、まー、一般的にはそうなんだけど」

気まずそうに言うカノジョに、

「気にしないで、大丈夫です。年金生活みたいなものです」

いや、さすがに苦しいぞ。

明らかにわかったのは、今度はどうやら自分が護られようとしているらしいことで、それはそれで不本意だった。

そうして、テッサに掛け合って、あのとときの自分が選択したのは、潜入工員兼情報収集役だ。

これ以上、銃器を持たせなくなかったらしい二人は不本意そうながら、その任務ならばと、しぶしぶ認めた。悪いな、自分も穀潰しの夫というのはなりたくないのだ。

稼がず、【妻】に頼る【夫】とは、カノジョの文化で「穀潰し」とやらになってしまうという。それは、何となくそれは嫌だったのだ。

■
そういうわけで、自分は銃を使わない範囲で色々やって来た。

(それが役に立つとはな)

隠身しながら接近し、あっさりとは無力化したIDを身につけていたやつが例外なのかどうかは確かめねばならない。入念に死骸を漁る。

(このタグは……、いや、正気か?)

ソウジロウは、意外な思いを得る。嫌な意味で。

それは、どこからどう見てもブリタニアの軍人のものだ。地域的なものを考えれば、大使館に配備されている兵のものだろう。潜入工作やら暗殺やらをするにあたって、身分がわかるようなものを身につけるアホがどこにいるというのか。

背後に銀河を背負いそうになったソウジロウであるが、(何らか指揮系統が乱れたのかも知れん)と、なんとか気持ちを治した。

さて。そんな相手が持っていた短機関銃。あっさりといえればサブマシンガンだ。ミシンのように気軽に銃弾を吐くことができる程度の代物だ。

これを使えば、ミッションの難易度は下がる。一瞬、手に取ろうとして、固まった。

(君さえいれば銃などいらぬ。俺は……自分はそう誓った)

実利と想いの天秤だ。ほんの少しだけ黙考し、目を背ける。

(君がいないなら銃はいる、ということでもないだろう)

「……」

銃は、見て見ぬふりをすることにした。

ソウジロウは銃以外の物資と装備、ドッグタグだけ回収すると、回線をオープンにした通信機に掠れた声で呻く。声真似は得意のひとつだ。

「き、こ、こちら……。ターゲット、南東に、逃げ……」

と告げ、オープンのボタンを押したまま倒れ込む。ような演出をする。

南東は、つまりルルーシュたちの逃亡先から真逆の場所だ。

銃などいらぬ。

(敵の練度は低い。遮蔽物もいくらかでもあり、明度も低い。ゲリラ戦に持ち込み、時間稼ぎをする程度、どうとでもなる)

何しろ、自分は専門^{プロフェッショナル}家だからだ。

【プロフェツショナル③】 13話

ふむ、と気配を探る。

おそらく、こいつらは本業の職員ではない。それは感じていたが、改めて見ると露骨にわかる。

奪った通信機をしまいながら、暗闇の先を見つめる。

自分の陽動（というには拙劣すぎるが）に乗せられて、敵はこちらに向かってきている。

安堵した。

逃げたはいいが、目撃者の可能性のあるその他の民間人たちを殲滅するような相手であったならこちらも無茶をしなければならぬところだった。

省みると、色々としくじっていることに気がつく。まあ、いま気にしては仕方がない。

ルルーシユとスザクを、何よりナナリーを逃がす。

そのために全力を尽くす。そして、生きて帰る。それを誓ったのだから仕方ない。

本来は、襲撃者を皆殺しにするしかないはずだ。

考えかけて、否定した。

そもそも、この作戦はどの馬鹿が、ここまで杜撰に立ち上げたのか。戦略的な目標はルルーシユと話した通り理解できるが、戦術的には無能にすぎる。

「……指揮系統の分散、分裂、あるいは勢力争い等による抜け駆けなどといったところか」

いずれにせよ、自分たちには有利でしかない。

ソウジロウは、残っている敵の隊をすべて無力化すべく、闇から闇へと身を翻した。

■ 「一体何が起きている……」

すでに誰ひとりいない神社に踏み入った、とある隊長は困惑の声を漏らした。

ターゲットはいない。

ただ、ターゲットのうちのひとりが使用しているといった車椅子が残されているのみ。

ついでに言えば、(かなり、どうでもいいが)神主もいない。

「逃げられたのか」

部下に搜索をさせながら思索していると、無線機から声になる。今にも死にそうな声だ。無線機は受信は常にオープンである。——送信は、混戦や混乱を防ぐため安易な案件で使わないようには統制している。

他の部下も通信の内容を聞いたらしく、即座に搜索の手を止めて、こちらに目を合わせる。

無言のままうなずくと、意識を肝に込めて声を上げる。何、ここまでくればもはや隠密の必要はない。

「貴様ら、聞いたな！」

「はっ！」

速やかな応えが返ってくる。

うむ、さすがは我が精鋭部隊たちだ。こうした汚れ仕事は好きではないが、逆な面で、互いの信頼というか、絆めいたものが強まる気がするし、それは得がたいものだ。

「これより、全体でもって、追跡を図る！」

AとBは東方より進み、うち、Aはそのままターゲットへ仕掛ける。

Bは途中でAと分散し、後方を塞げ！ 蟻も通すな!!」

「了解！」

「CとEは西方と南方、自由に別れて進み、退路を塞げ！ 分かっているな、おそらく全滅したDのためだ、全隊、決死で行け！ 俺たちは北から潰しに行く！」

俺の合に従い、瞬時に動く配下たち。

これを逃れらるものはいまい。